

社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育てる社会科学習指導の工夫 — 問題解決的な学習にマンダラートを用いた公民的分野の授業構成を通して —

庄原市立高野中学校 岡村 実三

研究の要約

本研究は、社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育てる学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、社会的事象を多面的・多角的に考察する力とは、社会的事象がもつ多様な側面を多様な角度やいろいろな立場から捉え、既存の知識や新たに獲得した知識や情報を基に、分類や比較、関連付けなどの思考を通して概念性の高い知識を獲得していく力とした。この力を育てるには、学習問題を設定した上で、生徒の既存の知識を生かして社会的事象のもつ側面を理解し、異なった立場から考察して問題解決を図る授業構成が有効であると考えた。そこで「生産と企業」において、マンダラートを用いた問題解決的な学習を取り入れた授業を行った。その結果、多面的・多角的に考察する力を育てることができた。このことから、問題解決的な学習にマンダラートを用いた授業構成は、多面的・多角的に考察する力を育てるのに有効であることが分かった。

キーワード：多面的・多角的に考察 問題解決的な学習 マンダラート

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年，以下「要領」とする。）社会では、公民的分野の目標を「多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。」¹⁾と示している。そして中学校学習指導要領解説社会編（平成20年，以下「解説」とする。）では、社会的事象は多様な側面をもち、相互に関連し合っていることから「多面的」に考察することを求め、このような社会的事象を捉えるに当たっては、多様な角度やいろいろな立場に立って考えることが必要なことから「多角的」としていると述べている。¹⁾

国立教育政策研究所が行った特定の課題に関する調査（平成19年）では、公民的分野の主な課題として「概念としての理解」と「説明する力」が不十分であることを挙げている。²⁾このことから事象と事象の間の関連を見だし、意味を説明できる力を育成する指導の工夫が求められていることがわかる。

このような力を育成するためには、生徒が主体的に知識や事象間の関連を見出す学習過程が必要である。そこで本研究では、問題解決的な学習を取り入れた授業構成とし、導入の場面で一面的な見方や考え方では解決できない学習問題を設定する。続く展開の場面で学習問題を追究し、対象となる社会的

事象に関する知識や事象間の関連を見いだして多面的・多角的に考察し、終末の場面で学習問題の解決に至る構成で授業を行う。また、本研究では、特に展開の場面で生徒の思考を補助するためにマンダラートを用いる。マンダラートは、八つの枠に学習内容に関連するキーワードを書き込むことで思考の外化を促し、大意を把握したり関連付けて考えるのに役立つ思考ツールである。また授業を構成するに当たっては、学習内容から獲得する知識と、その知識を生徒から引き出す発問を構造化しておく。こうした授業構成により、既習の学習内容を基に多面的・多角的に考察する力を育てることができると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 多面的・多角的に考察する力について

(1) 多面的・多角的について

「要領」は、公民的分野の目標を「現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。」²⁾と示しており、事実を正確に捉え、公正に判断するためには、多面的・多角的に

考察することが前提となると考える。さらに「解説」では、多面的について「学習対象である現代の社会的事象が多様な側面をもつ」と示し、多角的については、「社会的事象をとらえるに当たっては、多様な角度やいろいろな立場に立って考えることが必要となる」³⁾と示している。

以上のことから、多面的とは社会的事象がもつ多様な側面を、多角的とは社会的事象を多様な角度やいろいろな立場から捉えることであると考えられる。

(2) 多面的・多角的に考察する力とは

佐伯真人(2000)は、「①社会的事象は様々な側面を持っていること、②社会的事象はいろいろな条件や要因によって成り立っていること、③社会的事象相互が複雑に関連し合っていることなどの特徴を持っており、それをとらえるために生徒自身が様々な角度から見ていくことが必要となる」⁴⁾ことから、社会的事象を広い視野に立って多面的・多角的に考察することが大切であると述べている。また、前述のとおり「要領」では、公民的分野の目標の中で、社会的事象を多面的・多角的に考察することを挙げている。

これらのことから、社会的事象は多面的・多角的に捉えられなければ、社会科としての見方や考え方の育成としては不十分であるといえる。

一方、社会的事象から用語や語句レベルの知識を学んだだけでは、新たな情報を得ただけで概念性の高い知識を獲得できたとはいえない。北俊夫(2011)は、概念的知識について「具体的な社会的事象と結びつけたとき理解することができる。」⁵⁾と述べている。社会科の授業では、新たに獲得した情報と既存の知識を結び付け、分類したり比較や関連付けなどの思考を通して、説明力のある具体的な知識を獲得し、さらに概念性の高い知識を獲得していく。

以上のことから、本研究における多面的・多角的に考察する力とは、社会的事象がもつ多様な側面を多様な角度やいろいろな立場から捉え、既存の知識や新たに獲得した知識や情報を基に、分類や比較、関連付けなどの思考を通して概念性の高い知識を獲得していく力とする。

図1は、本研究で取り上げる「生産と企業」における多面的・多角的のイメージを示したものである。企業の活動といえば、利益追求という経済の側面から捉えがちである。しかし企業は、利益とは直接関係のないメセナのような活動も行っており、この活動は文化の側面から捉えることができる。また、同じ経済の側面であっても、立場や視点が異なれば認識も

大きく異なってくる。市場の独占を例に考えると、市場を独占する企業は市場をコントロールできるため利益を得やすくなるが、競争が制限されるため、消費者は不利益を受けかねない。したがって、企業の活動を理解するためには多面的・多角的に捉えて考察していくことが重要なのである。

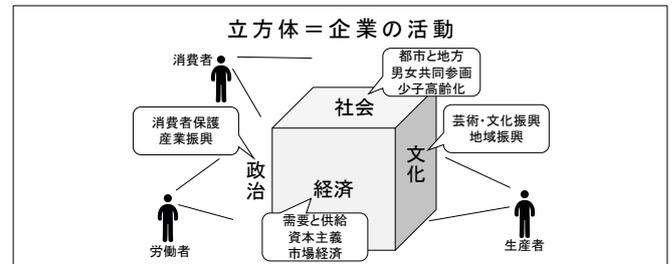


図1 社会的事象を多面的・多角的に捉えるイメージ⁽³⁾

2 問題解決的な学習にマンダラートを用いた授業構成について

(1) 社会科における問題解決的な学習について ア 問題解決的な学習について

問題解決的な学習について、北(2015)は「子どもたちがめあてをもって主体的に知識を習得・獲得していく授業」⁶⁾としている。主体的にとは、授業者が社会的事象に関わる知識や事象を捉える見方・考え方を一方的に伝授するのではなく、生徒自らが社会的事象に対して問題を捉え、その問題について追究し解決していくことを意味している。生徒の主体的な学びによる問題解決によって得られる知識は、断片的ではなく応用力のある生きた知識になる。したがって問題解決的な学習とは、生徒自らが問題を捉え、追究し解決していくことを通して、主体的に知識を習得・獲得していく学習であり、生徒の学び力を育む学習であるといえる。生徒が追究する社会的事象は、前述のとおり多様な側面をもち、立場が異なれば事象の捉えも異なってくることから、追究する過程において事象を多面的・多角的に捉える必要がある。

イ 問題解決的な学習の授業構成について

問題解決的な学習は、これまで様々な学習過程で実践されているが、単元全体を視野に入れた上でおおそ問題把握→問題追究→問題解決の過程で構成される点が共通している。中田正弘(2014)は、単元全体の問題解決的な学習の過程を次頁表1のようにまとめている。

多面的・多角的に考察させるために、単元全体を貫く学習問題を設定し、一単位時間を単位に社会的

事象のもつ問題を追究した上で、そこから得られた知識を基に単元末で学習問題を解決していく授業構成とする。問題解決に向けて追究することで生徒は多面的・多角的に考察を進め、その結果、概念性の高い知識の獲得につながるものとする。

各単位時間においても、その時間で解決すべき問題を設定し、問題把握→問題追究→問題解決の過程で授業を構成する。この過程の積み重ねが学習問題の解決につながるよう、単元全体を構成する。

表1 問題解決的な学習の過程⁽⁴⁾

学習過程	内容
問題把握	社会的事象に出合い、学習問題や学習計画を立てる。
問題追究	学習問題を解決するために、調べ・考えることを中心に行う。事実をきちんと理解することが主たる目標になる。
問題解決	追究の過程でわかったことや考えたことを基に、学習問題の解決を図ったり、学習を進展させたりする。

ウ 問題解決的な学習と社会科における知識について

社会科は、社会的事象を基に多種多様な知識を学ぶ教科である。しかし、知識を構造化することなく学ばせることは、断片的な知識の習得に終わり、応用力や汎用性のある知識の獲得や社会に対する見方や考え方を育てる授業にはなりえない。岩田一彦(2001)は単元の授業設計について「構造化された単元設計・授業設計には、知識分類の視点が不可欠である。」⁷⁾と述べ、学習内容については「単元の学習内容が、構造化された知識として提示されれば、学習内容の定着性・応用度が高まる。」⁸⁾と述べ、知識の分類と構造化の重要性を説いている。また北(2011)は、知識の抜け落ちや無駄な重複を防ぎ、確実に習得・獲得させるためには、知識そのものを洗い出し、関連的、階層的に整理する工夫が求められると述べ、社会科の学習で基本となる知識を「概念的知識(中心概念)」「具体的知識(説明的知識)」「用語・語句レベルの知識」の三つとし、単元ごとに三つの知識を構造的に整理した知識の構造図を作成することの必要性を説いている。図2は、北の論を基に、三つの知識の構造を示したものである。⁽⁵⁾

問題解決的な学習では、生徒は問題解決のために分類や比較、関連付けなどの思考を行う。単位時間では、既存の知識では説明できない問題を追究・解決していくことを通して、主として具体的知識を獲得し、単元末では、具体的知識だけでは説明できな

い問題を、それまでに獲得した具体的知識を基に追究していくことで、主として概念的知識を獲得する。そうして生徒が主体的に考察して獲得した知識は、応用力のある生きた知識になると考える。そのため授業者には、単元において獲得させたい知識を明確に持ち、それを順序立てて構造的に整理しておくことが求められる。

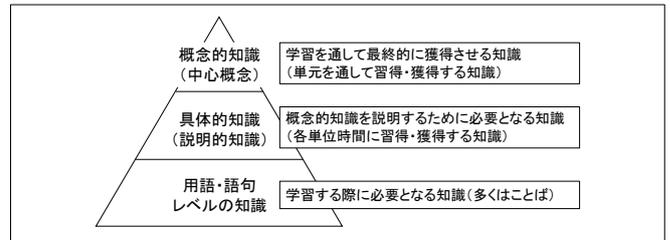


図2 社会科の授業における知識の構造⁽⁶⁾

エ 知識と問いの関係について

生徒の知識を引き出し、思考を促すのに重要な役割を果たすのが問いである。岩田(2001)は、「知識は問いの答えとして示されている。したがって、知識の構造は、問いの構造に転換できる。」⁹⁾と述べている。単元や単位時間で生徒に獲得させたい知識を構造化し、その知識を引き出すために発する問いも知識に対応させる形で整理して授業を行えば、生徒の思考の流れが円滑なものになり、問題の解決に役立つと考える。

本研究では、単元を貫く問いを学習問題、各単位時間で解決を図る問いを中心発問、社会的事象を捉えるために必要な基本的な問いを補助発問と位置付け、生徒に習得・獲得させたい知識と問いとの関係を表2のように整理する。

表2 本研究における知識と問いの関係

知識の段階	問いの種類	問いを知る場面	問いに答える場面
主に概念的知識	学習問題	単元はじめの場面	単元末の場面
主に具体的知識	中心発問	単位時間の導入の場面	単位時間の終末の場面
用語・語句レベルの知識	補助発問	単位時間の展開の場面	単位時間の展開の場面

授業者は、授業で発する問いについて、その問いに対応する知識が何であるか、発する場面はどこか、考えさせる場面はどこかを意識して発問していくこととする。

(2) マンダラートを用いた学習について ア マンダラートについて

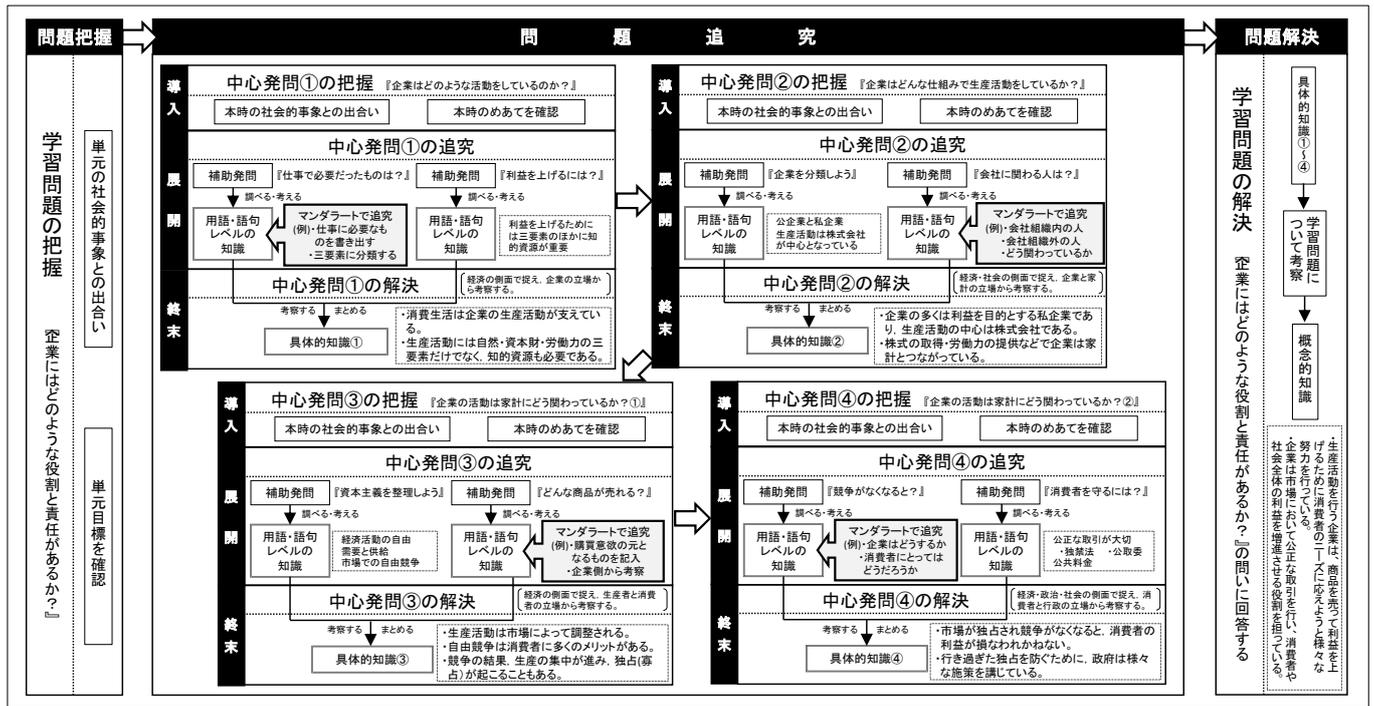


図6 本研究の問題解決的な学習にマンダラートを用いた授業構成

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

中学校公民的分野において問題解決的な学習を取り入れた単元学習を行い、学習過程においてマンダラートを用いて学習問題を追究させれば、社会的事象を多面的・多角的に考察する力が育ち、概念的な知識を獲得することができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	方法
社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育てることができたか。 ①社会的事象を多面的に捉えることができたか。 ②社会的事象を多角的に捉え考察することができたか。 ③概念的知識を獲得することができたか。	プレテスト ポストテスト ワークシート
マンダラートは学習問題の追究に有効であったか。	アンケート

(1) プレテスト・ポストテストについて

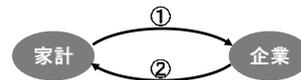
図7のプレテスト・ポストテストの問題設定理由は、次のとおりである。

問題1は、企業と家計との関係をどのような側面から捉えることができたかを検証する問題である。

問題2は、企業がもつ多様な側面を捉えることができたかを、身近な企業を例に検証する問題である。

問題3は、企業の活動を企業の立場と消費者の立場から捉えているかどうかを検証する問題である。

- 1 下の図は、家計（消費者）と企業（生産者）の間の関係を示したモデルです。①と②の矢印には、それぞれどのようなことがらが当てはまりますか。



- 2 2013年に開業した「道の駅たかの」は、どのような形で高野町あるいは高野町民に貢献していると思いますか。
3 J R西日本が三江線を廃止する方針を示したことについて、様々な議論がなされています。三江線の廃止についてあなたはどのように考えますか。資料①～③を参考にして答えなさい。

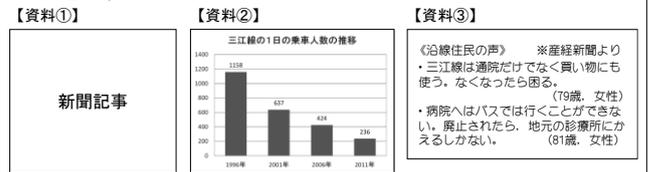


図7 プレテスト・ポストテスト

(2) アンケートについて

アンケートは研究授業終了後に行う。4段階評定尺度法を用いて、マンダラートを取り入れた学習の有効性についての生徒の意識を把握する。また、自由記述欄への記述内容からも生徒の意識を把握する。

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 平成27年12月15日～平成27年12月18日
- 対 象 所属校第3学年（1学級13人）
- 単元名 生産と企業
- 目 標
 - ・財やサービスを生み出す生産が、利益を目的として組織・運営されている企業を中心に行われていることを理解できる。
 - ・資本主義における生産の仕組みや市場における取引について、生産者と消費者の両方の立場から考察し、企業の在り方について考えることができる。

2 研究授業の指導計画

時	学 習 内 容
1	身近な社会的事象から、地域の企業の活動内容と必要な要素の比較を通して、企業の生産活動について考察する。
2	企業を種類や役割を基に分類し、株式会社の仕組みについて理解する。
3	資本主義経済の自由競争の仕組みについて理解し、企業の活動が消費者に及ぼす影響について考察する。
4	生産の集中と市場の独占について理解し、企業の活動が消費者に及ぼす影響について考察する。
5	企業の活動が社会に及ぼす影響について考察し、自分の言葉で表現する。

V 研究授業の分析と考察

1 社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育てることができたか

(1) 社会的事象を多面的に捉えることができたか

図8は、プレ・ポストテスト問題1の家計と企業の関係についての生徒の回答を「売買関係（企業が売り手）」「売買関係（家計が売り手）」「労使関係」「資本関係」の四つに分類し、それぞれを記述

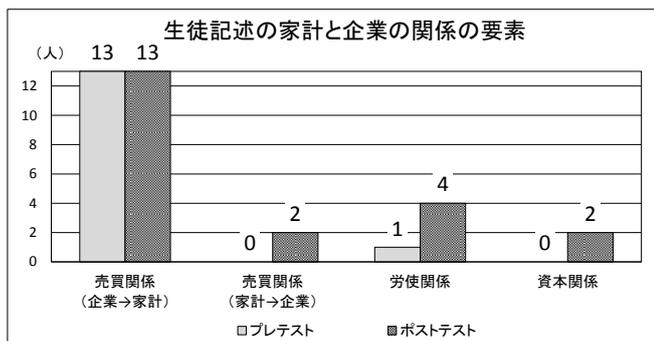


図8 問題1の結果

した人数を表したものである。

学習を通して「売買関係（企業が売り手）」以外の関係に気付いた生徒が、1人から7人に増加した。その内1人は3つの要素を記入していた。また、売買関係を、家計側の「安く買いたい」、企業側の「高く売りたい」の購買・販売心理から記述した生徒は、4人から9人に増えていた。

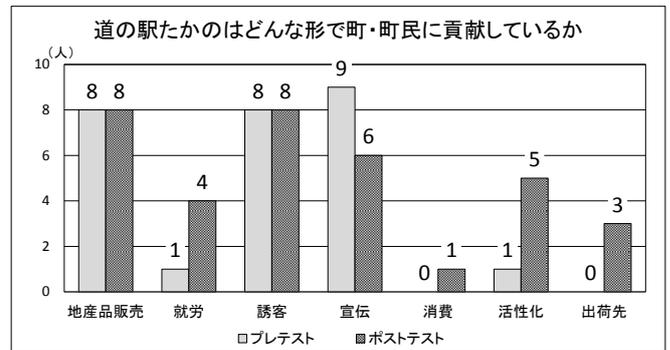


図9 問題2の結果

図9は、プレ・ポストテスト問題2への回答結果を分類したものである。プレテストでは見られなかった「消費」「出荷先」の要素がポストテストでは見られるなど、身近にある企業が持つ側面の捉え方が増していることがわかる。

生徒Aの記述を表4に示す。学習前は地産品販売の場のみでの捉えであったのが、学習後には就労などの働きを捉えることができていることがわかる。

表4 生徒Aの記述内容の変化

	記 述 内 容
プレテスト	高野の生産品を売る。
ポストテスト	高野の商品の売り場になった。 農家の作物の売り場になった。 高野に人があつまるきっかけになった。 高野の人の働く場になっている。

これらのことから、社会的事象を多面的に捉える力を育てることができたと考えられる。

(2) 社会的事象を多角的に捉え考察することができたか

表5は、プレ・ポストテストの問題3の回答の理由をどの立場から記述しているかを示している。

表5 問題3への回答の生徒の立場

プレテスト	ポストテスト			計 (人)
	A	B	C	
A：地域住民の立場から	1	1	4	6
B：企業の立場から	0	0	0	0
C：両方の立場から	0	0	7	7
計 (人)	1	1	11	13

地域住民と企業の両方の立場からの記述がプレテストでは7人いたが、ポストテストでは11人に増加している。一方で、立場が地域住民のみの生徒は6人から1人へと大きく減少している。立場が変化した生徒Bの記述内容を表6に示す。

表6 生徒Bの記述内容の変化

	回答	記述内容
プレテスト	反対	廃止にしてしまうことにより沿線住民の人々は不便になり、この町に住まないようにしようと思う人も出てきて、その町の過疎化がどんどん進んでいってしまうから反対です。
ポストテスト	反対	利用している客もいるし、その企業が運営することができなくなるのなら、公企業が運営したりその企業を支援したりして、消費者目線になって考えた方がいいと思うからです。地域に何かしら貢献をしていけば、そのうち利用客はだんだん増えていくと思います。

生徒Bは、プレテスト・ポストテストのいずれでも、三江線の廃止には反対と答えた。しかしプレテストでは沿線住民の利益のみを記述していたが、ポストテストでは鉄道を運営する企業側のことも考慮した記述となっている。

これらのことから、多くの生徒が三江線の廃止について住民側・企業側の両方の立場から多角的に捉え考察することができたといえる。

(3) 概念的知識を獲得することができたか

学習問題「企業が果たすべき役割と責任」に対する回答内容は、「公正な取引」「消費者・社会への貢献」「商品の提供」「雇用」の4つに大きく分類できるものだった。それぞれを記述した人数をまとめたのが図10である。

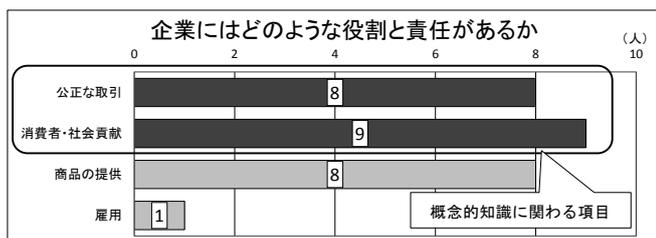


図10 概念的知識の獲得について

160ページ図5に示した概念的知識「企業は市場において公正な取引を行い、消費者や社会全体の利益を増進させる役割を担っている。」に関わる「公正な取引」と「消費者や社会への貢献」の両方について述べていた生徒は6人、いずれか一方を記述した生徒が5人で、合わせて11人が概念的知識に関わる記述をしていた。以下に示すのは、両方について述べていた生徒の記述の一部である。

- ・企業は商品のできるだけ希望に近い値段で売り、独占しないという責任がある。その反面、地域の人にお金をはらってもらっているから、地域のためにスポンサーになったりするという役割もある。決して消費者が損だけをするようなことをしてはならないという大事な責任も役割もある。
- ・企業は社会に貢献しなければいけない役割と責任がある。貢献するためには、消費者のために物を安く売ったり品質改良などをしなければいけない。そのためには企業同士での競争が必要になる。この競争を生むために、国や地方は独禁法や公共料金などのきまりを作っている。

まとめの生徒記述

(____ 部は公正な取引、 ____ 部は消費者・社会貢献に関する記述)

企業が担っている役割と責任について、消費者の立場や社会全体の視点から考察し記述しており、この記述には、「生産と企業」の学習において、企業の活動を市場原理や消費者の立場から考察したことが生かされている。このことから、多面的・多角的に考察することで概念的知識を獲得することができたものと考えられる。

2 マンダラートは学習問題の追究に有効であったか

図11は、マンダラートを取り入れた学習が、学習問題を考える際に有効であったかについて意識調査した結果である。



図11 マンダラートの有効性について

アンケートの「マンダラートを取り入れた学習が、本時の問いを考える際に役に立ったか」の問いに、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をした生徒は13人中12人で、有効性を感じた生徒が多かった。肯定的な理由には「考えを整理できた」「物事をいろいろな方向から見ることができるようになった」「八つの穴を埋めるには、いろいろな目線から物事を見ないといけない」といった記述があった。これは、質問への回答を考える際に多様な視点から考察することにマンダラートが役立ったと感じていると考えられる。

実際に生徒Cが第3・4時に記入したマンダラートと、第4時の中心発問「自由競争はメリットばかりだろうか」への回答を、次頁図12に示す。

